

地域包括ケア時代の 薬局・薬剤師の役割



ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科
統合医療学寄附講座特任准教授
医師・医学博士 狭間 研至

第27回 薬剤師が変わるためのたった1つの概念

在り方が変わらないはずがないのに
薬剤師が変われない理由とは

高齢化が進み、地域医療は外来化学療法や在宅での輸液など多彩な薬物治療が行われるようになる中で、薬局や薬剤師の在り方が変わらないはずはありません。

ましてや、昨今、厚生労働省から発表された「患者のための薬局ビジョン」や健康サポート薬局、かかりつけ薬局といった概念や方向性は、いわゆる門前薬局の“計数調剤”から薬剤師はシフトしていくべきということを示しているのだと思われます。

しかし、毎日の業務が変わるかということ、あまりそういった実感が無いという方も多いのではないのでしょうか？

地域包括ケアや在宅療養支援に関するセミナーや講演会に参加したとしても、一夜明けて薬局に出勤すれば、相変わらずの日常が待っているはずで、病院でもらった処方箋をもってきて、早く薬を持って帰りたい、あまり詳しい説明はいらない、とにかく待たせるな、といった決してフレンドリーとはいえない患者さんに気を遣いながら、調剤過誤はあってはならない、間違った説明をしてはならないというプレッシャーのもと、なんとか無事にやり過ごすという毎日がまた始まるわけです。

その毎日を変えようとして、在宅療養支援の現場に出向いたり、バイタルサインを学びに行ったり、OTC 医薬品の勉強会に出たりしても、毎日の仕事は、外来の患者さんがメインで、血圧を測定するような雰囲気はなく、OTC 医薬品を販売しようと思っても、量販店やインターネット通販に価格の面で大幅に不利だということを考えると、あふれる患者さんや積み重なる薬歴記載の前に、変わるなんて無理と、あきらめのような境地になる方も少なくないのではないかと思います。

ポイントは「服用した後をフォローして
確認すればよいだけ」

堂々巡りのような毎日を試行錯誤しているうちに、あることがきっかけで、ぱっと視野が開けて、その後の薬剤師としての活動が大きく広がっていったという薬剤師さん何人かにお会いするようになりました。そういった方の話を聞いたり、医療現場でご一緒したりしていくうちに、そのポイントや共通項に気づき、それを自分の薬局での活動に当てはめると、ほとんどのケースでうまくいくことが分かりました。

それは、薬剤師が患者さんに薬を渡すまでではなく、服用した後をフォローして確認するということです。

現在の薬剤師の仕事では、「これは下剤です。便秘のときに2錠服用しましょう」、「これは痛み止めです。1日3回食後に飲みましょう。胃が荒れる恐れがあるので、この胃薬も一緒に服用してください」といった、薬の説明をして渡すというところまでしか担当していないのではないのでしょうか？

それを、その後「お通じは出ましたか？ 下痢はしていませんか？」、「痛みはどうですか？ 食欲は落ちていませんか？」と聞くだけで、患者さんとの関係が一変します。うまくいかなかったときには、薬剤師としての専門知識(薬理学や薬物動態学、製剤学)を駆使して、なぜそんなことになったのかを医師や看護師に説明するといったことで、医療専門職との関係も一変するのです。

これらのことを行うのに在宅やバイタルサインといったことは、必須ではありません。外来の患者さんに、帰宅後、適当と思われる時期に電話するだけでもよいのです。

もし、あなたが「薬剤師として変わりたいけど変わらない！」とジレンマを感じているのであれば、一度試してみてください。びっくりするような変化があるかも知れません。